

「二セ札」 ☆☆☆

2009（平成21）年2月5日鑑賞＜GAGA試写室＞

監督・共同脚本：木村祐一

佐田かげ子（小学校の教頭先生）／倍賞美津子

中川哲也（知的障害を持つ子供）／青木崇高

戸浦文夫（村の庄屋、元陸軍大佐）／段田安則

橋本喜代多（紙漉き職人）／村上淳

花村典兵衛（写真館の館主）／木村祐一

大津シゴ（かげ子の教え子）／板倉俊之

小笠原恵三（戸浦の陸軍時代の部下、印刷のプロ）／三浦誠己

島本みさ子（大津の愛人、飲み屋の雇われママ）／西方凌

倉田政実（刑事）／宇梶剛士

池本豊次（住職）／泉谷しげる

検察官／板尾創路

裁判官／遠藤憲一

2009年・日本映画・94分

配給／ビタース・エンド

<二セ札づくりって、悪いこと？それが第1のポイント！>

「日本一多芸な男」と言われている木村祐一が監督初作品で放つのは、「二セ札づくりって、悪いこと？」という問題提起。それがこの映画の第1のポイントだ。

もちろん、刑法148条は1項「行使の目的で、通用する貨幣、紙幣又は銀行券を偽造し、又は変造した者は、無期又は3年以上の懲役に処する」、2項「偽造又は変造の貨幣、紙幣、又は銀行券を行使し、又は行使の目的で人に交付し、若しくは輸入した者も、前項と同様とする」と定めているから、通貨偽造及び行使は重大な犯罪。すると、木村祐一はそんなことも知らないバカなお笑い芸人？いやいや、そんなはずはない。文化庁が支援しているところを見ても、この映画が犯罪を助長するような内容に仕上がっているはずはない。

<かげ子はなぜハマったの？>

最初に佐田かげ子（倍賞美津子）に対して貧しい村を救いたいという名目で二セ札づくりを持ちかけたのは、かげ子の教え子で、今はブローカーとして生計を立てている大津シゴ（板倉俊之）。かげ子がそんな話をハネつけたのは当然だが、かげ子に対して二セ札づくりの正当性を理論化したのは、村の庄屋で陸軍大佐であった戸浦文夫（段田安則）。

戸浦のかげ子に対する説得文句は、第1に「二セ札で誰が死にます？誰が損します？」。そして第2に、戦争中に日本軍が中国で二セ札をつくっていた事実を引き合いに出したうえ、「お国が二セ札つくって、僕らが作ったらあかんという法はないでしょう」というもの。小学校の教頭をしているかげ子は、村人から全面的に信頼されている人格者でありかつ教養人。そんなかげ子がこんな言葉にコロリとハマリ、以降二セ札づくりグループの資金調達部門を担うわけだが、それは一体なぜ？これこそが、この映画の重大な問題提起。さあ、私たちはそれをどう受け止めれば？

<戸浦はなぜ作戦統括を？それが第2のポイント！>

かげ子に断られた大津が次に二セ札づくりを持ちかけたのは、戸浦と紙漉き職人の橋本喜代多（村上淳）、そして写真館の店主の花村典兵衛（木村祐一）の3人。橋本は躊躇したが、意外にスナリ「やろう」と言い始めたのが戸浦。

陸軍大佐として戦争に従事していた戸浦が、戦後の軍国主義の否定と急激な民主化政策の中で生きる希望を失っていたのは仕方のないところ。そんな中、大津が持ちかけた二セ札づくりは徐々に心躍る仕事だったが、彼だって相当の知識人。したがって、通貨偽造・行使が重罪であることは十分認識しているはずだ。そんな戸浦が軽いノリで二セ札づくりを提案してきた大津の言葉に乗っかって、二セ札づくりに合意したうえ、作戦統括つまりそのボスになったのは一体なぜ？それがこの映画の第2のポイントだ。

しかして、戸浦のかげ子に対する前述のセリフは理屈に合ってる？それとも詭弁？

<求めたのは二セ札づくりではなく、ホンモノづくり！>

この映画は山梨県下で実際に起きた戦後最大の二セ札偽造事件を題材とし、タイトルもズバリ『二セ札』とした問題提起作。作戦統括になった戸浦が作戦遂行のためにわざわざ呼び出し、新メンバーに加えたのが陸軍時代の部下で印刷のプロの小笠原恵三（三浦誠己）。戸浦が小笠原を含めた全メンバーに対して求めたレベルは、「二セ札をつくるのではなく、ホンモノをつくる」こと。『ヒトラーの贗札』（06年）を見れば、ホンモノ以上にホンモノに近い二セ札がつくられていたことが明らか（？）だから、ホンモノをつくれれば、それはもはや二セ札ではないことになる・・・？わかったようなわからないような理屈だが、とにかく戸浦たちが目指したのは二セ札づくりではなく、ホンモノづくり？

<面白い小道具（？）は、生きた亀>

この映画のそんなテーマを象徴するのが、かげ子が女手1つで育ててきた知的障害を持つ哲也（青木崇高）が川で捕まえてきた一匹の亀。哲也は亀と共に河原から石を持ち帰り、亀に似せて石を削っていたが、完成した亀の姿をした石は一瞬かげ子も見誤ったほど（？）ホンモノの亀そっくり・・・？そんな哲也がかわいがる生きた亀が、この映画では終始面白い小道具になるので、それに注目！

<資金をどうやって？>

かげ子や戸浦が暮しているこの村は和紙の産地であり、橋本も小笠原も二セ札づくりには絶好の職人だから、材料の調達はお手のもの・・・。他方、二セ札を印刷するには高性能な印刷機が必要だが、新千円札が発行された昭和25（1950）年1月当時、それを購入するには100万円程かかるらしい。そこで問題は資金だが、貧乏な村を救うための二セ札づくりに、まず100万円必要というのはそもそも自己矛盾？

住職の池本豊次（泉谷しげる）に対して、かげ子がワケを話して資金援助を求めても体よく断られたが、その理由が「犯罪に加担することなどもっての外」ではなく、「成功する見込みが見えないのでは・・・」というところが面白い。一体この村の知識人たちの頭の構造はどうなっているの？

<秘密保持は大丈夫？>

資金調達係はかげ子と大津の2人だが、大津の方も成果はゼロ。しかし、何がホンモノで何が二セモノかの判断は難しいから、ホンモノを二セ札としてみせれば、その二セ札は限りなくホンモノに近いのは当然。すると、住職に対してホンモノを二セ札だと言って見せれば、住職は二セ札づくりの成功を確信してくれるのでは？これもケツタイな理屈だが、それによって住職からはもちろん、その後次々と大金が集まったから不思議なものだ。

ところで、こんなに公然と資金集めをして秘密保持は大丈夫？近所の主婦たちがどこからともなくかげ子たちの二セ札づくりの噂を聞きつけて我れ先に出資の申し出をしてきたから、私の頭の中ではそんな心配はますます拡大。主婦たちが出資を申し出たのは、二セ札づくりが成功したら出資額の2倍の二セ札（いや、ホンモノ？）を渡すとかげ子たちが約束したからだ。

子供を学校に行かせたいからと言って小銭をまとめて持ってくる主婦がいれば、お金の代わりに農作物や家畜を出資する主婦も。一体この村はどうなってるの？そしてまた、こんなに村あげて二セ札づくりをやって、秘密は保持できるの？

<ヘンな仲間の、あっと驚く仲間割れ！>

お調子モノの大津は最初からどこかうさん臭い感がある。そのうさん臭さを板倉俊之が見事に熟演！また、大津の愛人で飲み屋の雇われママをやっている島本みさ子（西方凌）も意外にいい女だが、写真屋の花村に対してこの仕事が終わったらヌード写真を撮らせてやると約束するなど、どこか性悪女風・・・？また根っからの職人のくせに、えらくおしゃれな橋本もどこかヘン。

他方、戸浦が呼び寄せた小笠原はたしかに花村以上の印刷のプロのようだが、戦後5年も経っているのにまだ上司の戸浦に敬礼するようなヘンな奴。そう考えると、まともなのは戸浦とかげ子だけのようだが、実はこの2人の価値観もどこかヘン・・・？

そんなヘンな仲間が資金集めまではチームワーク良く進んできたが、やっと資金が集まり印刷機を購入すべく、戸浦、小笠原、大津の3人が車で出かける中、あっと驚く仲間割れが！ネタばらしは避けるので、そんなシーンはあなた自身の目で。

<こんなにすぐバレたのでは・・・>

小笠原はまだ完成していないと主張したのに対し、かげ子はこれで十分だと主張し二セ札の使用を焦ったのは、村の中である殺人事件が発生し、倉田刑事（宇梶剛士）たちが村の中に入り込んできたため。そこで合意したのが、かげ子が危険を承知で二セ札を使ってみるという意外に単純な話。しかし、もしここでバレたら、戸浦のお屋敷に印刷機などがあるのだから、かげ子だけの単独犯行で取ってしまうことなど到底不可能。木村祐一監督の初長編映画はテンポよく進んでいくが、ここらあたりはちょっと甘すぎ。

また、ここで二セ札とバレなかったのは、例によって（？）かげ子が二セ札を使わずホンモノを使ったからだとしたら、かげ子はチーム全員を裏切ったことになるはず。それはともかく、ここで二セ札がバレなかったことが実証されたため、かげ子が出資者である村のおばさんたちにきっちり2倍の二セ札を配り、おばさんたちは大喜びだが、意外にもこの二セ札はすぐにバレてしまったから、さあ大変。

こんな田舎村で殺人事件と通貨偽造・同行使事件の捜査とは倉田刑事も大変だが、こんなトンマなグループでは、犯人逮捕は時間の問題・・・。

<クライマックスは法廷シーン その1>

この映画は94分と短い。しかもストーリーはテンポ良く進んでいき、戸浦以下犯人は順次に逮捕。そして遂に、かげ子の小学校にも警察がやって来ることに。さて、この時のかげ子の思いは？

この映画のクライマックスは、意外にもかげ子たちを裁く法廷シーンで訪れる。結果的に戸浦とかげ子が主犯格とされ、懲役15年を言い渡されたが、検事（板尾創路）からの質問に対するかげ子の答えが面白い。かげ子に弁護人がついていのかどうかよくわからないのは残念だが、検事の質問に対して「私は正直言って、悪いことをしたという気持がない」と言うかげ子の爆弾発言に、裁判官（遠藤憲一）はビックリ。「あなたはそれでも教育者ですか？」と裁判官はムキになって反論するのだが、この議論を聞いているとどうも裁判官の言い分よりかげ子の言い分の方に軍配をあげたくなるから不思議なもの。

そこがこの映画の面白いところであり、木村祐一監督の真骨頂！

<クライマックスは法廷シーン その2>

さらにそれを補強するのが、たくさんの二セ札を持って傍聴席に入ってきた哲也。亀を捕まえてきた哲也が千円札を折った紙ヒコーキを飛ばす姿を見て、かげ子が叱っていたシーンが冒頭にあったが、それがここで生きてくる。すなわち、顔を真っ赤にしてかげ子を追及していた検事の前に飛んできたのが、哲也が千円札で折った紙ヒコーキ。

一瞬法廷はシーンと静まり返ったが、その後哲也がいっぱいつくってきた二セ千円札を傍聴席でバラまき始めたから大変。それまで神妙だった傍聴人たちは一斉に立ち上がり、我れ先にその千円札を拾おうとしたから傍聴席は大騒動に。裁判官がいくら「静かに！」と叫んでも取まらないのは、みんなそれが二セ札だと知らずホンモノと思っているためだ。

さあ、こんな毒気いっぱいのクライマックスシーンを、あなたはどう理解・・・？